

## 念仏と名利

仏道を成就せんとする私にとつて、様々な悪魔が現われてその障碍となるが、その中でも一番ものすごく、根底から私を覆すものは、貪欲の一相たる名利心である。

世間においては名誉は最も重んぜられるところである。しかし名誉の尊重せられねばならぬことゝ、名利心の奴隷となることとは、根本の違いがある。名の尊重すべきを知るが故に、人は必ず他人を尊敬しようとする。その人の性を利用して、他人に尊敬を強い、あるいはその為にあさましき工作を勞するが如きは、真に恐るべき煩惱の奴隷となるものである。

これ如来智慧光による自己凝視を欠けるものである。

一派一宗の管長の椅子をめぐつて、醜き選挙競争の行われるが如き、その裏面内心に動くものは決して仏心ではなくて名利の煩惱にすぎない。世間一片の空名の成就されんことを求めて生きる者は、一片の空名の失はれるところ、悲観怨恨、自暴自棄の谷底に墮るであろう。仏子の恐れても恐るべきはまことに名利心である。

我が聖人の如きは、世間仮名の修学を棄て、念仏道に入られてよりこの方、「名利の大山に迷惑して」と悲しみつゝ、世の底に埋れて生きられた方であつた。名利どころか、世に知られることすら恐れた方であつた。

人に治められねば治まらぬほどの者は悪党である。しかも悪党は断じて高きものによつて治められようとはしない。絶えず自我権力によつて人をその権力範囲に拘束しようとする。

人に治められねばならぬほどの生活をしてはならないと共に、決して人を治めようとしてはならない。人を治めようとする者は必ず人を暗くする暗の中心となる。

念仏の子は必ず、光の中心となる。

一切から手を放し、六字の中に合掌し、自己吹聴の口を念仏に転じ、自然法爾に念仏すれば、自然法爾にすべてが治まる。その外、一切手を出すべからず。

自分は念仏道を成就した気で、その気位で親を治めようとする子に真の念仏なく、念仏によつて妻を怒らす夫に真の念仏なし。

岡山支部に行った時、石井の母が、「先生おかしいことがあります。本部の報恩講に参つて帰つて来ますと、他の団員の皆様方が、大変有難くなつていられます。どうしたことでしょう。」と言う。確かに、集つて来るいつもの方が、誰も彼も一段と深く変つている。答は簡単である。

「一人喜べば万人喜び、一人泣けば万人泣く大悲を根底とするが故である。もし一度貪欲ものを言えば喜ぶといえども人随わず。悲しむといえども人を動かさず。いわんや我執をや、権力をや。心せよ念仏の子、道は如来如来を實現したもうに尽きたり。」

聖人泣きたもうて七百年、聖人喜びたもうて七百年、今日にしていよくこの喜びに喜び、その悲しみに泣く。聖人如来大悲を根底としたもうが故である。

純正光明団員は、念仏しつつ無名のままに地下に埋れることをもって、本懐の至りとなす。位の為の学問を弄ぶべからず。仏学は知識聖人の生命である。経の一字一字は生ける金色の如来である。もし名利心によつてこれを汚せば、仏罰を蒙り、永く御冥見にもれて、仏学もまた三塗の業とならん。

聖人念仏道を成就したもう。末世の輩、これによつて栄達権勢の具とせよと教えたまわす。純正光明団員たる僧侶は、僧位を競い、栄達逸楽の為に寺院に止まらず。威張るべからず、諂へつらうべからず、唯、世間の識不識を超えて、己おのれまず忠実なる念仏行者となるべし。

高屋萬兵衛、一切に手を出して一切を成就せず。その浅薄なる名利心にこき使われて「多忙々々」と奔走するに、ついに一生空費あるのみ。多忙も時に人を墮落せしむ。一行一心は、ただ念仏の正定業たるにとまらず。一行一心たるはずの念仏も、萬屋の多忙においてその光を放たず。

心せよ念仏の僧侶よ。その趣味を放棄せよ。統一せよ。汝の施設経営を単純にせよ。多忙を一事の上に集中して、短き人生を、精進の二文字たらしめよ。自行なき化他は、これを売談僧に譲れ。

人間の煩惱は悪雑なるも、大法は天真である。天真のままに念仏讚嘆せよ。必ず第二の念仏の子を産まん。

語るべき多くを持たずとも、語るべき明確なるただ一つを持って。必ず人の心を貫く。

「この度の聖講一週間において、賢くなつて帰るかわりに、知つたはずのものを本部において、無智になつて出て行つて下さい。」

とは、昭和十年夏の聖講における開会の語の一節であつた。学んで無智に至るもののみ、真に学ぶと言うべし。もし自慢出づれば、消化せざる食物、胃の腑に止まつて、化して我慢の毒となれるのみ。顔色いよく蒼白、人見ることを喜ばず。やがて病氣激しきに至つて、人漸く之を敬遠し、御本人は世の尊敬を勝ち得たと自惚れて、いよく得意然となる。すでに病、膏盲に入れるのみ。恐るべし。この種の人の淋しさとは、人の我を知らざるを悲しむ愚痴心のみ。

他人の上げ下げ、すべて己を規準とするが故に、真の念仏行者すら時に卑しき者に映り、時に何ものをも持たぬ卑しき者すら、己の名利貪欲に叶えば善人と映ず。かくの如く観る眼の狂えるを覚らず。ただ己の好む者に近づき、好まざる者に遠ざかる。好ましきもの、時に恐ろしき悪知識たり、嫌いて時に宝玉の如き人より遠ざかる。名利を満足せしめざるが故に。かくてその足跡乱れて、真実一道成就せず。されど憶え、世尊も「善哉々々」とほめたもうことあり、孔子もまたほめることあり、聖人もまたほめたもうことあるを。名を挙げたくば、仏祖善知識の前に名を挙ぐるに如かず。

三日にして功成り、一月にして成就し、一ケ年にして有名ならんとするはまことに現代の通弊である。かの「成功出世早わかり」と言つた式の本の売れ行きを見よ。

数ヶ月にして天下に知られ、一朝にして葬られる先駆者？たちを見よ。如何に有名病、成功病にたたられているか。短日月の有名、すべてこれインチキである。

劫初より燃え続けている聖なる火、二千五百年の昔より、聖者より聖者の胸に流れた生命の血脈、静かにその流れに己を没して、その生命の火に己を捧げきる者、どうして、全体を忘れて、おのれ一人の有名成功を考えられようぞ。

問題は、如何に我等の生活が淳一であるかないかと言うことである。されば大衆を沸きたゝせることのみを考えて、自己自身、深く行歩し、聞法求道しない住職を持つる寺院はすべて行詰つてゐる。かゝる寺院の化境内に一人の眞の行者生れず。深く教法を聞かなければ、堂々たる建築物より、一本の箒、一個の椀まで、悉く居所に迷い、一切死物となり、雑毒海を出現している。一心生きて万心輝き、一物輝いて万物光る。教法の如く聞き、教法の如く信じ、教法の如く修め、教法の如く行ずるところのみ、眞実の道は輝き、一木一草に至るまで生かしきるのである。

「ほめられて嬉しくもなし、そしられて悲しくもなし、我は我なり。」

と言う歌がある。たしかにこうした気概が一面にあつてもいい。しかしこの歌は、親鸞聖人の行歩を拝んで、こうした一面を拝むことが出来るが、同時に世にはびこる悪党もこれを口ずさむことが出来ると思う。

親にも叱られ、師にも捨てられ、友にも見はなされた孤独の子が、時に夕闇迫る野辺に立つて「人生は淋しい」と泣きつゝ、感傷の甘さに酔うて猶かつ念仏しつつ、さながら悪人正機の世界を歩むかの如く考え得る。それと同じく、この毀誉褒貶の場合もまた然りである。

褒められて喜ぶが人情の自然である。故に、私は褒められて喜び、貶おとされて悲しむ。褒められて喜び、そしられて泣くが人の子なるが故に、世尊の仏弟子を褒めたもうことに意義があり、聖人に叱られて悲しむところに意味がある。しかるを、叱られて泣いて懺悔すべき時「そしられて悲しくもなし。」とうそぶき、教法に叶うが故に、褒められて喜ぶべき時「褒められて嬉しくもなし」とすねる時、「我は我なり。」とは、頭の下らざる悪魔の声、我慢我執硬直にすぎなくなる。

かゝる我慢によつて、「ほめられて嬉しくもなし、そしられて悲しくもなし、我は我なり。」とうそぶくも、内心は決して然らず。その幽鬱不安なる眼光を見よ。その態度の冷さを見よ。合掌なく歡喜なく、懺悔なきを見よ。人は必ず、いかなる時にも、褒められて嬉しく、そしられて悲しきものである。ただそれを深くし、純化し、転じて、何を、いかなる時に喜びあるいは悲しんだかが問題である。

純なる子は必ず、その親の賞讃の一声を天の声の如く喜ぶ。親の叱責の一語、時にその一生の方向を決定する。これあるが故に、子は実に堂々と強く正しく生きぬくのである。

しかるにかかる親なき子は、親に対してひがめる子は、無責任にして雑多、時々に移りゆく巷の群集に褒められんとするが故に、ところさだめず流転輪廻するのである。

念仏の子は親に生きる。念とは子心であり、仏とは親である。親来つて、子の心に生きて、念仏となる。子は親たる仏に生きて、仏を念ず。一念仏のうちに、親あり子あり、仏凡一体一如の境、すでに、名を挙げて十分なり。すでに褒められて嬉しく、叱られて悲し。故に念仏の子は眞の嬉しさに徹し、又眞に悲しさに徹す。これを鸞師

は淳心とよぶ。一あつて二なきが故に一心であり、親心天地を貫きたもうが故によく相続する。名利の煩惱汝、何処にありや、彼今合掌して念仏界裡に名をあげて得々。